

光秀は、生誕が不明であるなど、その前半生は謎に包まれた部分が多い。「麒麟がくる」では、光秀は美濃の守護代、斎藤道三の家臣として重用される。道三の死を機に美濃を追われた光秀だが、信長と出会い、人生が大きく変化していく。というストーリーになる。NHKによると、近年の歴史研究も踏まえ、光秀を私怨により本能寺で信長を討った「謀反人」としてではなく「勇猛果敢かつ理知的な天才」と捉えなおして描くという。題名にある「麒麟」は、王が仁のある政治を行うときに必ず現れるという伝説の獣をさす。

1467年に始まった応仁の乱後の混乱にあえぐ戦国の世を描く中、登場人物が「麒麟」到来を願う思いを口にする場面もある。今作は「戦国時代の起源ともいえる信長や徳川家康が名を成すまでの過程」を丹念に描く点が特色。

「今の時代も生きやすい世の中とは言えないのではないか。未来が見えないという点では戦国の世と共通している。光秀ら武将の生き様から、学ぶ点は多い。」

光秀の「謀反」像一新



明智光秀が生まれた時代	
34(天文3)年	織田信長(染谷将太)、尾張に生まれる
49(天文18)年	明智光秀(長谷川博己)の主君、斎藤道三(本木雅弘)の娘である濃姫(川口春奈)と信長が結婚
56(弘治2)年	長良川の戦いで、道三が斎藤義龍(伊藤英明)に敗死。のちに、光秀のおじ、光安(西村まさ彦)らが城主を務める明智城も落城。光秀は越前へ逃れたと伝えられる
60(永禄3)年	桶狭間の戦い。信長が今川義元(片岡愛之助)を破る
67(永禄10)年	信長、斎藤家を滅ぼす。稲葉山城の名を岐阜城と改めて本拠に。「天下布武」の印判を使い始め、天下統一の意志を示す
68(永禄11)年	光秀、足利義昭(滝藤賢一)に足輕衆として仕える
70(元龜元年)	越前討伐中の信長が、近江の浅井長政の離反に遭う。光秀は木下藤吉郎(のちの豊臣秀吉、佐々木蔵之介)や徳川家康(風間俊介)と共に、信長の騎馬を救う。姉川の戦いで、信長らが浅井氏と越前の朝倉氏を破る
71(元龜2)年	信長による比叡山延暦寺焼き打ち。手柄を上げた光秀は近江国志賀郡を拝領する。坂本城の築城を始める 光秀、義昭と主従関係を解消
73(天正元年)	将軍の権力回復を目指す義昭を信長が京から追放。室町幕府滅亡
75(天正3)年	長篠の戦い。信長らが武田勝頼に勝利
76(天正4)年	光秀、龜山城の築城を始める
78(天正6)年	光秀の娘、玉(のちの細川ガラシャ)が細川忠興と結婚
80(天正8)年	信長、石山本願寺を屈服させる
82(天正10)年	信長、武田家を滅ぼす 本能寺の変。光秀、信長を京で自害に追い込む 光秀、山崎の合戦で秀吉に敗れる。その後死亡

※は架空の人物
明智光秀を巡る人々

